

---

# 我らは卓球部っ！！

ネッシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我らは卓球部っ！！

### 【NZマーク】

NZ88889E

### 【作者名】 ネッシー

### 【あらすじ】

部活紹介の時に現れたとんでもない奴は、卓球部の部長だった。成り行きで入った卓球部での色んな出来事です。

## 第1話・部活紹介

俺は今年から高校生になる。。

今は高校の入学式で、温ぬか化のせいか、もう縁になってしまった桜を窓から見ながら、お決まりの事しか言わない、長つたらしい校長先生の話を聞いてい。

いや、左から右に聞き流してると言つた方が正確か。。

ほんやりしてこると、どうやら入学式が終わつたらしい。

前にいる俺の担任になつたっぽい人が、なんか指示をだしている。

あいうえお順で並んでいるので、やまもといあきこ山本昭人である俺は後ろの方にいて全く聞こえない

俺のクラスが動きだしたので、みんなに便乗し立ち上がる。

そして俺のクラスである一年一組についた。

その後、先生が諸注意などを色々話してから、

「このあと部活紹介があるから見ていくと良い」と言いつつクラスを出でていった。

俺は帰るつかな、とも思ったが周りが誰も動かないの、まあ良いか、と思つて見ていくことにした。

「野球部でーす!」とか言つて素振りを始めたり。

「合唱部でーす!」とか言つて歌い出したり。

他のところも印象の濃いものはあまり無かった、まあ合唱部は結構上手くて感動したが、あのアカペラってヤツ? でも、まあその程度だ。

最後の方になつてきてみんな飽きてきたら、そいつはやつて来た。

一応クラスのドアを空けて

「おー、お前行けよ

「やだよ、お前が行け」

とか言つて譲り合つている。

ハツキリ言つて

「何ここつらキモツーー」と本氣で思った。

結局一人で入つて来て、真ん中まで来ずに、はづかの方で「卓球部です…。」とか、言つてゐる。

さすが、卓球部だなとか思つてゐると、タタタ…、とびつかい旗を持つて廊下を走つてゐる人影が見えた。

そして一年一組の開いていいるドアから、思いつきり「とあつー」とか言つて、ジャンプして先に居た一人の前に降り立つた。旗にはでっかく『来たれつ！卓球部つー』の文字が、

「」とつにちわーつ…。卓球部部長のサクちゃんですつー。

…みんな啞然としている。もちろん俺もある。

わざわざから居た連中と、

「お前の担当せはいじやねえだろ？」

「良いじやん××、お手伝いだよ、お・て・つ・だ・い」

なんて話してゐる。最初に居た連中は頭を抱えている。

サクちゃんが「ひらり」を向いた

「では×2、皆さんに質問がありますー」の中で、俺私、中学の頃卓球やってましたよーとか言う人

「ハイッ！ とかいつてサクちゃんは右手を高く上げている。

⋮

⋮俺のクラスは誰も手を挙げない。

これは予想通りだつたのかサクちゃんは続けた。

「では×2の中でも卓球に遊びでも良いから触れたことがある人」

また「ハイッ！」とかいつて手を上げている。

⋮

⋮また誰も手を挙げない

ちよつと焦つた感じになつてサクちゃんは続けた。

「じゃ、じゃあ、卓球を知っている人

「ハイツ！」

：

誰も手を挙げなかつた。

サクちゃんはちょっと涙目になつて言つた

「うそ×2 有り得ないって卓球つて日本人の99.999...%は知つてるよ！ 手え上げてよ！俺、無視されてるみたいじゃん悲しい！悲しきぎる！」

みたいじゃなくてされてんだよ、つて思つたけど訳がない

周りを見てみると、2、3人の親切な子が遠慮がちに手を挙げてい  
た。

サクちゃんはパアーツと向日葵みたいな明るい笑顔になつて

「その今上げてる子！ 最高っー・愛してるわー。」

「では×2、今上げた子も上げて無い子も卓球部は大歓迎ですっ！  
！ 女の子でも初心者でも大歓迎！特に女の子っ！ 入ってっ！  
我が部活に花が欲しいんだっ！」

男しか居ないのか…。

「我ら卓球部は、永遠に不滅だーっ！」

とか、訳の分からん事を書いて、サクちゃんは走って教室を出よう  
としたが、何も無いところで「べふっー」とか書いて豪快に転んで  
いた。

⋮

直感的にこの部活には誰も入らないだろうなと思つた…。

⋮ つづく

## 第2話：入っちゃいました

俺が卓球部に入ったのは成り行きだ。

ただ、絶対に部活には入らなくてはならなくて、  
それに俺は人と話すのが苦手だから、卓球部なら大丈夫かなと思つ  
ただけだ。

仮入部に行つた時に喜ばれたから、といつわけでは無い

あの向日葵のような笑顔で、本当に嬉しそうな顔で  
「ありがとう」

つて言われたからでは断じて無い…！

…たぶん。

ちょっとだけ、俺がここに居たら喜んで貰えるのかな？とか、俺が  
必要とされているのかな？とかとも思つちゃつたから、

…もしかしたら、少しだけ、あの笑顔にほだされたといつことある  
かもしない。

別に俺だけが特別では無い、来た人全員にあの笑顔を向ける。

でも、俺が来たことでそんなに歓迎された事が無かつたから…、や  
っぱり嬉しかつたんだと思つ。

そここの卓球部はスゴかつた。何がスゴいかつて、仲間外れが居ないのだ。

どこの部活だつて、上手い人と下手な人で派閥が分かれたり、気持ち悪い奴がいたら仲間ハズレにしたりすると思う。

みんなで練習を始めて、1人位あぶれていたりすると、サクちゃん改め、作山先輩が絶対に気づいて、その人の所へ向かい

「俺と一緒に打ってくれない?」と言つ

メガネ掛けていてクラスで気持ち悪いとか言われてそうな奴でも、絶対に手を差し伸べる…。

俺みたいないつも「1人で良い」とか言つている奴が、それを言われる訳なんだけど、それが強がりだったんだと思い知らされる。

なんて嬉しいんだろう…。

作山先輩は背が高くて、顔が小さくて、ちょっとだけカッコいい。なんかバスケをしてると言つた方が絶対に納得できる。

前に身長を聞いたところ185cmと言った。

俺が誰も入らないと思った卓球部は新入部員が5人も入った。

男三人、女一人だ、なんと女の子が入っている。1人は中学でもやつていてもう1人は初心者らしい

作山先輩は部長だけど二年生だ、ここは進学校で三年生になつたらもう世代交代みたいだ。

部活の最初は初心者組と経験者組で分かれて練習している、と言つても初心者は俺と女の子の一人しか居ないんだけど…。

その時に色々な人が教えくれるんだけど、ちょっと紹介しようと思う。

まずは作山先輩の場合…

ぽーん ぽーん

「ヤベ×2めちやくひや本能あんじやん、すぐえつめえ！ 僕の最初の時の十倍えつめえ！」

「ほんとですか～？」

「おう、俺が小二の時よう100回つめえ！」

「…」

「でもな、ちよっと肘下げで、もうちょっと前で打つと奥へ奥へ打つといふのが、そつ、まるで俺のよう！」

「…」

…

次は副部長である、河内先輩の場合。

「違ひつひー。手の位置はまじつー。」

「えつ、じじですか？」

「違ひつひー言つてんだろー。じじだ、じじー。」

「えつじじー。」

「やうーやうだー。じやあそのまま素振り100回ー。」

普通の一年の平部員の坂籐先輩の場合。

「いやあそれじゃダメだろ?」

「えつどいですか?」

「どいがって、玉が相手の所に入つて無いじゃん」

「…」

「だつて相手の所に入れなきゃダメだろ? ほら、こんな感じで入るから」

…

…と、まあ印象が大きいのはこんな感じだ。

部内ではこの三人がすば抜けて上手いが、一番教えるのが上手いと思つのが作山先輩だと思つ。

作山先輩は絶対に強制しない。それどころか

「教えるの上手く無い人も居るだろ？自分が違うと思ったら言うことなんか聞く振りして聞かんで良いから。良いとこだけ貢つとけ！もちろん俺もな」

なんて言つてゐる。

最初の作山先輩の印象はかなり変な人

今の作山先輩の印象は、『世界一明るくて、世界一優しい人』

…つづく

### 第3話・優しさの塊

作山先輩は優しい…。

つて言うか自分ではそう見せてないつもりかもしないけど、優しさが滲み出でている。

帰りの電車で4人位で座つて談笑していた時なんかは、

「あはは、あー面白れえ…。

やべえ、ちょっと今立つてみたいな気分だわ」

とか言って立ち上がり

みんなで「なんだよそれーー！」とか言って笑っている

ふと、周りを見てみると赤ちゃんを抱えたお母さんがドアから入つて来たところで、

座席は埋まつて居たけど、タイミング良く立ち上がったおかげで作山先輩の居たところに難なく座れている。

そして当の立つた本人は、

「ははは、マジかよー！」

とか言って談笑していた。

まあその時は、たまたまだらうなとか思つていた、

そして、ある程度経った頃

「ちゅうと立派樹立でー。」

といきなり坂篠先輩に声をかけた

「なんだよそれ？」

「今から女の子の子口説くのにお前がそこ居ると邪魔で口説けないんだよー。」

少し考えた後、坂篠先輩は納得した顔になり笑つて「ああ」とか言って立ち上がつたけど、俺には何の事だか全くわからない。

そして作山先輩を観察していると、

「お嬢さん、お荷物をお持ちしましょーつか？」

と、もう還暦は越えているだろつ腰の曲がつたお婆さんに声をかけていた。

「ふふ、大丈夫ですよ。」

「ああ、こんな素敵な女性の荷物が持てないなんて…せめてお座りになつた姿を見せて下さいー！」

「じゃあお言葉に甘えさせて頂きますね。ありがとうございます」

その後も「どー」で降りるんですか？」とか言つて、俺が自分の駅に

降りる時までは話し続けていた。

二人とも終始笑顔だつたのが印象に残っている。

そういえば、こんな事もあった。

俺が傘を忘れて困っていた時、

「日本、お前傘忘れたのか？」

「あ、はー…」

「そつかあー、ちょうど良かつたー。この傘余つてたんだよ、誰にも使われなくて可哀想とか思つてて、これでこの傘もちゃんと役目果たせるなー。」

と、笑顔で渡される。

「ありがとうございますー。」

その時は良く考えないで受け取っちゃったんだけど、それが間違いだつた。

⋮ 次の日

授業が終わり貸して貰つた傘を持ち卓球部の部室まで行くと、マンガを読んでいる坂籐先輩がいた。

「おー！」

「「」ここにありますーーあ、今日作山先輩来ますか？」

「来るんじゃねー?」

「いやあ、昨日借りた傘を返さつかと思つて…」

ぱつ、と驚いた顔をして「」を向き、傘を見て、そしてまたマンガに田線を戻すと、笑いながら、

「あいつバカだな」

と言つた。

どひしてか分からなくて意味を聞くと

「サクに言わないなら教えてやる」

と言われ何度も頷いた。

「あいつさ昨日俺が『傘は?』って聞いたら『今日は濡れて帰る日ー』とか笑つて言つんだぜー普通に忘れたのかと思つてたわ。」

全然分からなかつた。

今すぐ会いに行つて、すぐ謝りたいけど坂篠先輩に念を刺されてしまつた

「サクに言つなつていう約束守れよ、ありがとひつひつときやア  
イツは一番喜ぶんだ。」

作山先輩が来たときは、精いっぱい気持ちを込めて「ありがとうございます！」

ざいました！」と言おうと決めた。

「サクって優しいだろ？」

いきなり坂篠先輩に声をかけられた。

「はい！」

俺は正直に答える

「サクの優しさってな、自分を大切にしない優しさなんだよ。」

何となく分かる気がする。

「でな、自分一人で頑張って、人の優しさを受け入れないんだ。  
人に頼つた所なんて見たことが無い」

そう言われてみれば、そつかもしれない。

「だからな、時々で良いから助けてあげてやつて

俺は、首を縦に振つた。

「ありがとう」

その言葉が、本当に作山先輩の事を思つて言つている事が分かつて、坂篠先輩も優しい人なんだなと肌で感じた。

その後は部員がぞろぞろやつて来て、俺と坂篠先輩の話も終わり、傘を返して、その日は可もなく不可もなく終わつたが、少し作山先輩の事が分かつたような気がした1日だった。

…つづく

### 第3・5話・優しさの理由（サク独白）

俺には中学校時代の友達が居ない、この高校にはその事実を知っている人はほとんど居ないだろう。

この友達が居ない訳の一つにイジメられていたというのがあると思う。

別に、被害はあまり無かつた

ただ少しだけ無視されて、少しだけ机を遠ざけられただけだ。

みんなにとつて俺は少し気持ち悪かったらしい。

俺はちょっと汚かったから

もちろん話しあってくれる人も居た、  
けれど、俺から離れた。

だって俺と話しているせいでその優しい人まで気持ち悪がられたら、  
耐えられないだろ？

離れるなんて簡単だ、その人を無視してやれば良い、

そうすれば「なんだよコイツ…」となり、自然に離れていく、

間違つても

「俺から離れてくれ」なんて言つてはいけない、こんなの被害者ぶつて

「俺のそばに居てくれ」としか聞こえない。

だから、無視をする、じつすれば簡単に離れていく

ひとりにはもう慣れている

ずっとひとりで居れば誰にも迷惑を掛けない。  
他人に迷惑を掛けではない。

…じゃあ死ねば誰にも迷惑をかけずに済むのではないか?

… という考えがよぎった時、すこく怖くなってしまった

そして、ある事を思い付いた。

俺は人に迷惑をかける人間では無く、人に幸せを与えるられるのではないか?と…

俺はずつと自分を演じてきた、汚くて俺に近づくと嫌な事が起こる  
ような人間を…

俺のような人間を出さないために

だから、思い付いたんだ！俺が明るい人間を演じれば、クラスでイジメに遭つてゐる子や孤立してゐる子や大切な人を救えるのではないかと…。

中学校では俺が気持ち悪いといつ先入観が出来てしまつて居るので、高校から始める事にする。

ちょっと意味が違つ気もするが高校デビューだ！

俺は明るくなる！

そして優しくなる！

絶対に俺の居る学校でイジメなんか起こさせない！

全員が笑つて幸せになれるように！

ちょっと今時の子供が言つのもあれな気もするけど、俺の本当の願い事！

「世界平和！」



## 第4話・怒り

俺がこの部活で一番苦手な人は、副部長の河内先輩だ。

なんで苦手かつて言いつと、こつも怒つていて怖いからである。

なんか、少しでも気に食わないとこいつがあると「コラッシャー」と大きな声で怒鳴つてくれる。

俺らの事を田の敵にしているんじゃないのかつてくらに怒る。

…ある日の事

いつものように河内先輩に怒られていた。

「だからいつも言つているだろつ！ 何で同じ間違いを何度も何度も繰り返すんだ！」

そこに登場作山先輩！

「カワちゃん怒りすまよ。 カルシウムが足りて無いんじゃないか  
しづあ～？」

「作山つー？」

「お姉さんの骨をあげるから、後輩の事を許してあげてちょうだい  
？」

と言つてビーフジャーキーを取り出す。

「俺は犬かつ？！　て言つた骨ですかねえ！」

作山先輩と話していると、あの河内先輩ですか形無しだ。  
ビーフジャーキーを手渡すと「じゃーねえ」と言つて作山先輩はびつ  
かへ行つてしまつた。

河内先輩はやつさまで怒りはどくやら、かなり朗らかな顔で  
「おしつ、じゃあやるべ～」  
なんて言つてゐる、説教されなくて良かつたあと言つて気持ちと、自分で言つのもなんだが甘やかしあがだら？とこつ気持ちが入り乱れて  
いる。

作山先輩はいつも誰かが声を張り上げていたりすると、近づいてい  
や、なだめてしまつ。

怒られる事をしてゐるのを怒られないこと言つのは良いことだらうか？

別に怒られたい訳では無いけど、そんな事を考へてしまつ…。

周りの人たちのイメージだと真面目な副部長とアホな部長と言つて感  
じだと言つていた。

俺は作山先輩はどつても頭が良くて、いつも考へて行動してゐると思

えるのだが、それは俺だけだらうか？

こんな、作山先輩だが、一度だけ本氣で怒ったことがある…。

普通に練習をしていると、いきなり良く通る低い声で怒りに満ちた声が聞こえた。

「お前、一度とその言葉を口にするな

周りの温度が5度くらい下がった気がした…。

一瞬、誰の声が全く分からなかつたが、その声が作山先輩だと気づいた時、全身に鳥肌がたつた。

作山先輩のあんな声一度も聞いた事が無い。

いつも二コ二コ笑つっていて、仏様みたいな人だつたから、その一言は衝撃だつた。

言われた1年の男の子も、かなり怯えていた。

そうしたら、作山先輩が明るい声で  
「わるい、わるい、中断させちゃつて、続けて！  
お前は一度とそんな事言つなよ！」

「ハイ…」

小刻みに震えているが、男の子も少しは表情が軽くなつた気がした。

が、しかし、その後の部活はヒドかった。

作山先輩の雰囲気がいつもよりもおかしくて、無理して明るく装つているのが丸わかりで、改めて作山先輩の影響力の凄さを思い知つた。

いつもの先輩を太陽とすると、その日は周りをどんどん冷やしていく氷みたいだ。一年の男の子に、なんて言つて怒られたのか聞いてみると、

「俺は、あの言葉は一度と言わないと心に決めたんだ」

と言われ全く取り合つてくれなかつた。

次の日には作山先輩は治つていたが、俺はその一言がどうしても気になつてしまい、さすがに本人には聞けないので、なんとなく知つていそうな坂篠先輩に相談しに行つた。

「昨日の作山先輩のこと何ですか……」

「……」

「……先輩？」

「ああ、いや知らねえ」

嘘をついてこむよひじも、本当の事を言つてこむよひじも見えた。

でも、それ以上は何も聞くじとが出来ず、ひのじとなむれのじとひした。

……  
へひく

## 第5話・大切なもの（前書き）

サクちゃん視点で、少しシリアスです

## 第5話・大切なもの

あんな事言われた位でみんなに動搖すると思つていなかつた。

『なんだか最近つまらないんですよねー。あー死にたいなあ』

死にたい…

こんな事言つ奴はバカだと思つ、冗談でも許せない。

ただ俺もそんな事を考えていた時期があつたのも事実だ。

俺みたいな奴は一度と現れなくて良い。

我慢して…我慢して…

俺はどうなつてもいいから俺の大切な他人を幸せにしたい。

その俺の自分より大切な他人が『死にたい』と言つたんだぞ？

許せる訳が無いじゃないか！

笑顔がみたいから笑う、悲しい顔が見たくないからケンカを止める。  
俺の行動は全て人の為だ。

どつかの本に『自分の事を考えられ無い奴は人から好かれない』と  
あつたがそんなの無理だ。

俺の生きる意味が無くなつてしまつ…。

俺はちつぽけかもしれない…けれど、俺に他人を1人でも幸せにする  
力があるのなら、生きてみよつと思う。

俺が帰り道を歩いているとき、山本が少しキャラそうな他の学校の  
奴らと路地裏に入るところが見えた。

山本は結構大人しい性格だからあんな奴らと一緒に居るのはめずら  
しい、

気になってしまって、後をつけて見ると、案の定、楽しみ目的が何だか知らないけど、チャラい奴らに山本が殴られようとしている所だった。

俺は頭の中が真っ白になつて氣づいたら、殴ろうとした奴をぶん殴つていた。

相手は5人

1対1では負けないとと思うが、この人数じゃ無理だ、一斉にたこ殴りにされる。

「逃げろつーーー！」

それでも山本だけは守りたくて絶対に触らせなかつた。

：

何分たつたか分からないけど、意識が無くなりそうになっていたとき、俺の卓球部のみんなが20人位現れた、

あのバカ！なんで警察を呼ばなかつたんだ！

とか、多分、見当違ひな事を思つていて

少し俺によつて手傷を負つっていたチャラい奴らは、人数にビビつたのか、そそくさと退散していった。

「おい、大丈夫か？」

広樹が俺に手を差し伸べる。

俺はその手をとらずに立ち上がる。

体中から痛みが込み上げるが、この手を取る訳にはいかない。

俺は絶対ここでの優しいコトヤシラを絶対に傷付けさせない…。

そう決意し、全員を無視して、家に向かう。

チャラい奴らの顔だつて学校だつて覚えている。

顔だけは守つたので、あまりケガはヒドくないと思ったのか、無理やり病院に連れてくような奴は居ない。

それどころか

「せっかく助けてやつたのに」と言つてゐる奴もいる。

けれど、予定通り、それで良い…。

俺みたいな奴は、俺だけで充分だ。



学校からの帰り道の事だった、

いきなり肩を叩かれて、友達かな？って思って振り向いたら、なんか良く分からぬチャラい人たちだった。

「ちょっと話があるんだけど、あっち行かねえ？」

少し齧るような声で、争いを好まない俺は、思わず頷いてしまい、ついて行く事になってしまった。

人気の無いところに入つていって、どんどん恐くなつてくる。

どうやって逃げるか考えていると、突然チャラい奴らの一人が口を開いた…。

「俺らは、殴られても抵抗しない奴探してたんだよ。」

体中の血の気がいつぺんに引いた気がした。

いかれてる……恐い……なんで俺がこんな目に合わなきゃならないんだ  
!!

俺が恐怖で黙つていると、そいつが腕を振りかぶつてするのが見えて、痛みに備え目をギュッとつむる。

ドカッ

ドスン

：

え…痛くない…ナビ…

この音は?

恐る恐る皿を開けるとそこには作山先輩の後ろ姿

「逃げろっーーー！」

俺は思わず走り出した

人通りの多い所に着いて、作山先輩を置いてきた事による、すさまじい自己嫌悪に襲われる

ヤバい…ヤバい…

「どうしよう…どうしよう…

混乱した頭で携帯を取り出し、震えている手で文面を打ち、送信する

『作山先輩を助けて』

部内のみんなに一斉送信した。

その後、力が体に入らなくて道脇に座り込む

「「めんなさい…」「めんなさい…」

と、恐くて戻れない情けない自分にイラつき、それでも戻れない事を作山先輩に謝りながら…。

道脇でうずくまつていると、いきなり肩を揺さぶられた、そして怒るような声で

「ハア…ハア…サクはつ…サクはゞ」「だ…」

坂篠先輩だ…

す「」に息切れしていく、思いつきり走つて来たのがわかる。

震えながら道案内しているとぞくぞくと人が集まつて来て、部のほぼ全員が来ていて、20人位になつていた。

俺が殴られそうになつていた所に着くと、作山先輩の後ろ姿が見えた、

まだ作山先輩は殴りあつていた、といつより自分の後ろに行かせないよつにじているよつにも見えた。

「オイッ…お前らつ…」

坂篠先輩が普段では考えられないような声をあげる

チャラい奴らは人数にビビったのか、そそくさと退散していった、そして、作山先輩と目があつた。

助けてもらつとして不謹慎だと思つが、今、作山先輩を恐いと思つてしまつた。

いつもの先輩をみんなを照らす太陽とすると、今は一匹狼のよう…。

「オイ、大丈夫か？」

坂篠先輩が座つて いる作山先輩に手を伸ばす…が

その手を取らずに立ち上がり、そして、一言も発さず、どこかへ行つてしまつた。

そして、自分が『ありがとう』も『すみません』つていないことには気付いて、今は行きにくいので、明日言いに行く事にした。

このことを、後で後悔する事になるのも知らないで…。

.....  
へんじ

## 第7話・守りたい

次の日…。

朝、学校に着くと少し教室が騒がしかった。

会話を盗み聞きしていると、緊急全校集会が開かれるという放送があつたらしい

少し面倒に思いながらも、みんなが移動し始めたので、それに便乗して、体育館に移動する。

体育館に着き、しばらく経つと、壇上でたしか教頭だと思われる人が話しあじめた。

はつきり言つて全く興味が無かつたので、聞こうともせずボケつとしていた。

が、たまたま聞いた言葉に

「先日暴力事件がありまして…」

といふ声が聞こえて、壇上に釘づけになってしまった。

この先生の言葉を簡単に要約すると

先日、暴力事件があり。うちの生徒一人が他校の無抵抗の生徒を一方的に殴ったという事件があつた。

これは本人が自白してくれて、その他校の生徒も了承しているとのことだと、この問題を起こした生徒には厳重な処分を下すので、安心して学校生活を送つて欲しい。

ということを長々と30分位ぐだぐだと話していた。

良くわからないけれども、作山先輩の事が頭に浮かんだ。

全くやつた事が違うのに、どうしてか作山先輩の事のような気がしたんだ。

そして、全校集会が終わつてもいよいに坂篠先輩が、出て行くのが見えた。

これを見て、これは確信へ変わった。

わけ分からぬけれど、坂籐先輩を追いかけなきゃいけない気がして、俺は全校集会を抜け出した。

坂籐先輩に追いついて話かける

「先輩、どこ行くんですか？全校集会終わって無いですよー。」

俺の声に反応した先輩が振り返って答える

「あのバカを一度位殴ってやらなきゃきがすまないっ！！！お前的事殴ろうとした奴まで庇いやがって、自分一人に風が当たるようになやがった。絶対許せねえ！！！」

なんか、メチャクチャ怒ってるけど、俺は…

「俺も一緒にきます！」

残念ながら、その日は作山先輩は見つからなかつた

授業をサボつたのはこれが初めてだ。

坂篠先輩は行動が早かつた、学校まで帰つてくるといきなり走つて校長室まで駆けていき、＼＼＼＼＼

校長室っ！？いやいや、ここ入るのは勇気いるだろっ！

とかいう俺の心配をよそにドアを躊躇も無くバンツーと開け放ち

「作山明の処分を取り消して下さいっ！－！」

と言い放つた、中にいた校長もぽかんとしている。

そして、真剣な顔になり話し始めた…

「君が誰だか知らないが、暴力事件を起こした彼をどうして庇うんだい？」

「あいつが嘘をついているからです」

「まう、どんな？」

「あいつは自分から手を出すような奴じゃない、こいつがからまれている所を助けたんだ」

いきなり振られてびっくりしたが「ハイツ」と答える。

「はあ、そんな嘘をついてどうする、そんなの作山くんになんのメリットも無いじゃないか。それに相手方は怪我をしている。暴力沙汰で、この学校の評判を落とす訳にはいかないんだよ。」

「うむせえつ……」

大声を出されて普通にビビる

「あいつは自分のメリットなんか考えた事の無い奴なんだー！」

あいつは全ての人に優しくする。たとえ、どんなに自分を傷つけた奴でも…

うちの全校生徒があいつの味方だー！」

サクが自分の事を守れないなら俺らが守ってやるー！」

処分を撤回しろー！」

…ヤバい、何だか泣きそうだ。

「わ、わかった、まだ処分は決まってはいないので、君の言つこと  
も視野にいれて検討しようと思つ

校長先生もタジタジだ、けど、これで退学ということは無くなるだ  
ろい。

...  
へ  
ニ  
シ

- - - - -

俺を知っている全てのみんなへ

今誰かがコレを読んでいる時は俺はこの世にいないかもしません。

俺にとつての生きがいは、人を幸せにすることです。

今回の事件で俺を怖いとか、怯える人が出でくるでしょう。

俺が考えた結果、この後の人生で、俺が幸せに出来る人数と不幸にする人数を考えた時、俺はもう人を不幸にすることしか出来ないのではないか？

という結論に達してしまいました。

俺がいなくなつた事で、もし泣いてくれる人がいるのならば、それは俺にとつては悲しいことです。

俺がいなくなつた事で嬉しいと感じてくれる人がいるならば、それは俺も嬉しいです。

俺は人が好きです。すっげえ好き。だから全ての人に幸せになつて

欲しい。

こんな奴だから悲しいとか思わないでください。

そして、忘れて下せ。

作山明よ

- - - - -

こんな事を書いて、くしゃくしゃに丸めて捨てる。

本音丸出しの事を書いたら同情を貰てしまつ。

俺が死んだ事で誰も悲しまないような…

- - - - -

みなさんへ

俺は人が嫌いです。あいつらもムシャクシャして殴りました。

こんな所にいたくないので、どうか行こうと思います。

俺のものとか全部捨てて良いと言われて下せー。

作山明より

-----

何やつてんだ俺、こんな遺書まで書いて…

書いていたペンを置いて考えてみる。

俺は人を一人でも幸せに出来ただろうか?

一人も不幸にしてないだろうか?

人の悲しみを楽しみに出来る事が出来ただろうか?

人を幸せにしたいと願つて居るのに、それがもうどうやって良いのか分からぬ…。

今は全てがマイナスに働く気がする。

大切で大切で、全部護りたいのに、俺がいたら、俺のせいで不幸になる人が出てきてしまうかもしれない。

そんなの俺には自分が死ぬよりも耐えられない！

だから、居なくなろうと思つた。

でも、それもまた逃げてるだけで、俺はまだやれる事を全部やっていられない気がする。

だから、もう少し頑張つてみよつと思つ。

机の中にさつき書いたものをしまつていると、携帯が鳴つた。

そしてメールを開くと、泣き虫だった俺が人を笑顔にするために泣かないと決めた、あの日から…

初めて泣いた。

お前の考えなんかお見通しだ、バカ！

校長に直訴してサクの処分取り下げでもらったから。

今度こんな事するときは、俺に言え！

お前の処分取り下げの時、署名集めたんだけど、全校生徒の7割は  
すぐに集まつたぞ！

みんなお前に幸せにしてもらつたんだ！

お前にはもつと人を幸せにして、幸せになる義務がある！

勝手に学校から居なくなるなんて、俺ら全校生徒が絶対許さない！

わかつたなつ！！

from 山本昭人

先輩の処分なくなりましたよ！

俺スッゴく嬉しいです！

会つてからも言いますが、すいませんでした！  
そして、ありがとうございます！

先輩には何回感謝したって足らなくらいなのに、こんな事になつてしまつて…。

今度は俺がいくらでも助けられるようになりますから、待つてて下さい！

俺がこんな強い気持ちを持てたのも、優しい気持ちになれたのも、  
全部作山先輩のおかげです！

本当にありがとうございます！早く学校来てください！

- - - - -

それからも卓球部を中心に続々とメールがくる。

俺がやつてきた事は間違いじゃ無かつたんだろうか？

まだ、人を幸せに出来るのだろうか？

拭いても拭いてもまだ出てくる涙を拭いながら、この大切な人達が絶対に幸せになつて欲しいと願い、

そして、俺にその手伝いが出来るなら、俺の全てをかけて頑張ろうと誓つた。

} end{

## 第8話・良こひしょ（後書き）

この作品を作るとき、ずっと思っていた、自分のほのじこねぬいな作品を作りたいと思つてたんですが…。

なぜかどんびんシリーズに

自分で見てて悲しかつたです。

でも、自分的には楽しく書けたんで良かつたと思います。

このもで読んで頂けた方、本当にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8889e/>

---

我らは卓球部っ！！

2010年10月15日22時26分発行